

苦力から労働者へ

——平林たい子の満洲体験文学における中国人像——

李 雁 南*

From Coolie to Labor: The Image of Chinese People in Hirabayashi Taiko's Manchuria Experiencing Literature

LI Yannan

It was in 1924 when Hirabayashi Taiko went to Manchuria at the age of 19. This travel to Manchuria is the only Chinese experience of Taiko, and it is the origin of the image of Chinese people written by Taiko. She had only described Chinese as the other in both works of *“Abandon”* and *“In Treatment Room”*, but in *“Laying Train”*, they are written as a member of the proletariat in the world as well as Japanese workers. Taiko described their awakening, frustration and victory of class consciousness against Japanese imperialism. Unfortunately, in *“Laying Train”*, they are vividly portrayed as revolutionaries, but as individuals, they are only vague and typed symbols.

キーワード：平林たい子、満洲、中国人像、プロレタリア文学

Key Words: Hirabayashi Taiko, Manchuria, the image of Chinese, proletarian literature

1933年中国上海の現代書局が「投げすてよ!」「施療室にて」を含めた『平林たい子集』を出版した。翻訳者沈端先は序言で平林たい子のことを「社会民主主義文学団体の女性作家」(沈 1933:2)として紹介した。女性解放と革命運動に身を投じて、満洲で生死の境を彷徨いながらも革命の意志を忘れずに現実に真っ向からぶつかっていった平林たい子の巍然とした姿は当時の中国読者を深く感動させたのである。

一 平林たい子の満洲体験と初期文学

平林たい子が満洲の大連へ渡ったのは1924年で、19歳の時であった。この満洲行はた

* 中央大学政策文化総合研究所客員研究員

Visiting Research Fellow, The Institute of Policy and Cultural Studies, Chuo University

い子の唯一の中国体験で、たい子が描いた中国人像の由来だと考えられる。

平林たい子は中学校卒業式の翌日堺利彦を慕って上京し、堺の紹介で何人かの社会主義者やアナキストと知り合ったが、中にはのちに彼女を連れて満洲に行った山本虎三がいた。1923年9月関東大震災の直後、日本政府が治安維持を理由に社会主義者や朝鮮人などを弾圧したが、メーデーの集会に参加して逮捕されたことのある山本が再び逮捕され、同居者のたい子も刑務所に入れられ、浮浪罪で29日の拘留を言い渡された。二人は刑務所を出た後東京を離れて名古屋でしばらく友人のところに身を寄せていたが、そのうち山本が「手配中の思想要視察人」名簿に載せられたことが勤務先に知られたために職を失った。あいにくこの時たい子が妊娠したことが分かった。途方にくれた二人は山本の異母兄を頼りに大連に行くことにした。

1924年1月3日、たい子は山本に連れられてハルビン号に乗船し、5日に大連に着いた。二人は山本の兄の斡旋で満鉄の鉄道で仕事をしていた。「山本は事務員兼苦力監督、たい子は満人ボーイと二人で炊事と掃除を分担することにきまった。」(戸田 1982: 49) 中国の苦力及び日本人の労働者と一緒に働き、一緒に生活していた体験は、たい子の目をその文学出発時において労働者に向かわせた。しかも外部から労働者を傍観するのではなく、彼らと同じように搾取され、身をもって彼らと同じような苦難を経験していたのである。このことは平林たい子がプロレタリア作家になった最も根本的な原因だと思われる。たい子と山本は一生懸命に働いたにもかかわらず、山本が社会主義者であることを知った兄は警察に山本が不法ビラを印刷したことを密告した。その結果、山本は大連署に拘引され、内乱罪で起訴されて投獄された。栄養失調で妊娠脚気にかかったたい子は兄の家から追い出されて救世軍の慈善病院に入って、そこで女の子を生んだ。赤ちゃんは脚気にかかった母の乳を飲んだため、生後一ヵ月足らずでなくなった。たい子は獄中の山本を見捨てて一人で悄然と東京に戻った。

貧困のどん底に陥った生活、慈善病院での出産、妊娠脚気、赤ちゃんの死といった苛烈な満洲体験はたい子の初期作品に重要な素材を提供したのである。東京に戻ってから2年間の放浪生活を経て、たい子はようやく筆を取り上げた。「たい子には書きたくてたまらない素材があった。悲惨だった大連での体験をふまえて、主義に生きる若い女の挫折と再起にかける闘志を、なんとしても書かねばならぬ、と彼女は机に向かって毎日想を練っていた。」(戸田 1982: 94-95) 満洲体験に言及したたい子の初期作は数篇あるが、真っ向からこの悲惨な体験を取り上げたのは何といても「なげ捨てよ」「施療室にて」「敷設列車」の3篇だと考えられる。

日本の学者の多くは平林たい子を女性作家として取り上げ、その身体表現について多く論じてきた。たとえプロレタリア作家時代のたい子の作品についてもたい子が女性である

ことに重点を置き、主義のために生き、革命運動に身を投じた女性としてのたい子はいかに女性と無産者・革命者の間で取捨選択をしたのかに集中した。確かに男性作家と全く異質なたい子の鋭敏な身体感覚の描写は特に注目されやすいが、プロレタリア作家時代のたい子は〈女〉を書くよりも、無産者・革命者である自分と、自分と同じようにいじめられた労働者の悲哀と憤怒を書いたのではないかと思われる。それだけではなく、平林たい子が描いたのは日本人労働者よりも、苦力と呼ばれ、軽蔑された植民地満洲の中国人労働者である。彼女は「なげ捨てよ」「治療室にて」の両作で彼らを植民地の荒涼たる風景の一部としてしか見ていなかったが、「敷設列車」では彼らを日本人労働者と同じような全世界の無産者階級の一員として描き、日本帝国主義に反抗する彼らの階級意識の覚醒と挫折と勝利を描写したのである。

二 植民地の他者・無産者階級の同志

1927年3月号の『解放』に発表された短編小説「投げすてよ」は平林たい子の満洲体験をほぼ真実に描いた作品である。主人公の光代と小村洋三が日本から大連へ行く事情は前述の平林たい子と山本虎三のそれとほぼ同じだと思われる。たい子はこの作品において大連を植民地と呼び、中国人労働者を支那苦力と呼んで、彼らを植民地の卑賤な他者とみなす一方、日本人労働者の卑屈をも指摘した。

光代の苦力に対する感情は二つの面に分裂したのである。植民地の人間に対する嫌悪と軽蔑があると同時に、同じく無産者階級としての連帯感もあった。

まず、苦力の汚い外見に対して、光代は殆ど本能的な嫌悪を感じた。その中で長い辮髪は中国人の特徴としてまず光代の目に映った。「辮髪を縄のように頭に巻いた汚い支那人」（平林 1979：68）、「のろろと長い辮髪に黄色に埃を被った苦力達」（平林 1979：69）、「苦力達は、長いのろろした辮髪で」（平林 1979：72）といった苦力の辮髪を特に強調したような描写が多かった。光代の目に映った中国人の長くて汚い辮髪は植民地特有な風景の一部となり、そこには中国人が近代的な日本人と異質な前近代的で野蛮な植民地の人間だという蔑みが入っていると思われる。また、「泥だらけな手」（平林 1979：71）や「隣室の光代の所まで聞えて来るふいごのようないびき」（平林 1979：72）など、苦力は全く近代文明から外された原始的野蛮な存在として描かれた。それは「膚を刺すような一月の風が、植民地の箱のような建物の街路を吹きまくっていた」（平林 1979：68）という満洲の荒涼たる風景と「ペチャペチャと異国語で喋っている苦力たちの声」（平林 1979：70）とあいまって海外植民地を漂泊した光代を一層孤立させてしまったのである。

光代の孤立は風雪と寒気で日本と全く気候の違う大連という植民地にいる時の郷愁と、

長い辮髪をのばして意味がわからない異国の言葉を発する異人種の苦力と一緒にいる時の孤独感と、主義を捨てて現実に妥協する恋人に対する失望と、自分と同じ境遇にいる日本人労働者や浮浪者と共有できるはずの階級意識の欠如に生じたものであろう。苦力を嫌悪し疎外しながらも生きていくために苦力と一緒に働かざるをえないことは光代にとって絶望的なことであった。

しかし、光代にとって苦力は国籍や民族の面から見て確かに植民地の他者ではあるが、自分と同じ境遇にいることを考えればまた赤の他人でもなかった。苦力と寝食を共にしている間、光代は日本人労働者どころか恋人の小村でさえ苦力と同じように卑劣で汚いことに気づいたのである。「小村は、仕事場で覚えて来た汚い支那語で感情の捨場のように、苦力達の暗い室へ首を出しては、つまらない事をののしり……」（平林 1979：72）「汚い支那語」をしゃべることは小村と日本人労働者がもともと中国人苦力と同質なものであることを光代に見せつけた。

しかし実際、苦力達は全くこういう階級的連帯感を持っていなかった。光代の出産費用を負担したくない兄夫婦は小村を警察に引き渡した後、更にそれを口実にして小村との兄弟関係を断絶し、光代を追い出してしまった。光代が大きなお腹を抱えて兄の家を追い払われた時、「窓の外では、苦力どもが、『団結』などということには夢にも思い及ばない牛のような平和な顔で、トロッコを押していた。」（平林 1979：75）同じ階級の同志なのに、光代と苦力との間に何の意味疎通もなかった。苦力達は出産を控えた光代がこれからどうなるのかを全く知らなかった。たぶん知りたくもなかったろう。同時に光代も「三十人近い苦力が、真黒な粟飯と塩をかむような沢庵とをあてがわれて、朝、星空のうちから、夜、土もっこの手許がわからなくなるまで鞭で打たれるようにされて、働いていた。」（平林 1979：68）という苦力の悲惨な生活を目の前に見て不正な雇用制度と日本帝国主義政府の植民地政策を批判しながらも彼らのために何らかの形で実際の行動をとろうとはしなかった。苦力より光代の方が階級意識の先覚者ではあるが、しかし、それは考え方にとどまるだけで、出産を控えた若い彼女には自分自身の苦難ばかりに心を奪われて、苦力の苦難を深く考える余裕を持ちえなかったのである。この無力さを乗り越えられない限り、光代のような日本人無産者と苦力のような中国人労働者はおのおの自分の苦難だけに囚われて永遠に交叉しない平行線でしかなかりょう。

中国人苦力だけではなく、光代は社会の底でもがいている日本人貧困者に対しても彼らをその窮境から救い出すことはできなかった。にもかかわらず、同じ階級の間人としての連帯感を確かに覚えていたのである。例えば、途方にくれた光代は最後「行路病者の証明」（平林 1979：75）を持って救世軍の日本人婦女収容所に入り、そこで自分と同じような日本人貧困者に出会って、一層国籍や民族と関係のないいじめられた者に共通の悲哀

を感じたのである。「——何という、いたましい人生が、ここにもひろがっていることであらう。いや、こういう人生は、ここだけでもないのだ。地球の表面いたるところに展開されているのだ——」（平林 1979：76）日本と中国だけではなく「地球の表面いたるところ」という言葉から、1920年代コミンテルンの指導と旧ソ連の建国に鼓舞された全世界無産者階級の連合革命の高潮という背景が読み取れ、プロレタリア国際主義の理念が反映されたといえよう。この言葉は実際の行動を取る前のウォーミングアップと考えられてもよさそうなものである。

要するに光代は辮髪や髻といった外在的な差異よりも、中国人苦力と日本人労働者・貧困者との共通性を感じたのである。この共通性とは国籍や民族と関係のない階級というものにはかならない。日本帝国主義政府は日本人全員を代表したのではなく、独占資本家だけの利益の代弁者である。ひいては満洲のような海外植民地でいじめられたのは中国の苦力のほかに小村や光代と同じく社会の底に生きる日本人労働者も含められている。日本人労働者は中国人苦力と同じように、現存する社会を打ち破らないかぎり、日本国内でも海外植民地の満洲でもいつまでもいじめられていくのであろう。光代はこの点を見透かして、階級のための反抗を全く知らずに資本主義社会に従順な彼らに絶望した。「何処にも、この不当な雇用制度や、安価で下劣な植民地気分反抗するような光をもった目を探し出すことは出来なかった。」（平林 1979：72）「不正な雇用制度」は資本主義社会に対する無産者階級の批判で、「安価で下劣な植民地気分」は日本帝国主義政府が中国や朝鮮を始めとするアジア諸国に対する侵略を指摘したものである。たい子はここで階級闘争と植民地批判を同一視し、理念上のことだけではあるが、国境を越えたプロレタリア革命の必要性を痛感したのではないかと思われる。

「これがもし本当の無産者の愛であるならば、恋であるならば、その愛を矛にして、楯にして、敵の陣営へ突撃して行けない筈がないのだ！」（平林 1979：78）というふうに「投げすてよ」において、平林たい子は男女の恋愛とその男女の恋愛を達成するために主義を忘れて現実に妥協する態度を投げすてて、たとえ実際の行動に移る段階にはまだ到達していなかったにせよ、階級解放運動に邁進する革命者である光代のイメージを築き上げた。しかも、この革命は日本人労働者のための革命だけではなく、中国人苦力を含めた全世界の無産者、全世界のいじめられた人達のための戦いである。

三 無視された中国人

1927年9月号の『文芸戦線』に発表された「施療室にて」は直接一人称を使って、「私」が大連の施療室で子供を産んだ後、脚気にかかった自分の乳を子供に飲ませて子供を死な

せた悲惨な体験を描いた短編である。生死の間を彷徨う「私」にとって、出産直前の「とても堪らない痛み」（平林 1967：20）と出産直後の「手も足も厚い餅を張ったように全く痺れている」（平林 1967：21）という身体上の苦痛に比べれば、ほかの全てのことが二次的なものになってしまう。戦後の平林たい子に直結する女ならではの敏感で赤裸々な身体表現の原型がこの作品に見られたのである。

「私」にとって二次的で身の外物でしかない中国人が作品に四回登場した。一回目と四回目の車屋は「私」が施療室に行く前と出た後にそれぞれ登場し、三回目は「私」が施療室で生死の境を彷徨った時、死体を載せた担架の後を担いで窓の外を通った後ろ姿である。二回目は「卑屈な苦力たち」（平林 1967：18）で革命の裏切り者であった。

たい子は淡々とした態度でこれらの中国人を描いた。『哀乎小錢没有——』私を乗せて来た車屋は、迷惑そうにそう言って、朝銀の青い紙幣をひろげて私の掌に戻した。（中略）十銭銀貨を受取ると、車屋は『シェーシェー』と言って、前に自転車を引きに行く少年にラッパを高く鳴らして走り去った。（平林 1967：18）「哀乎小錢没有——」と「シェーシェー」という車屋の中国語が二回も出てきて、異国で夫を逮捕され、一人だけで施療室に運ばれる「私」の孤独を一層鮮明に表出した。同時に車屋が喋った異国語の発音を正しく聞き取れ、しかも全然好奇心を持っていなかったことは「私」が既に長く異国にいたことの証明にもなって、その次の「赤土の埃を多量に含んだ植民地の空気と、水八分に南京米二分の塩からい長い間の悪食」（平林 1967：18）につながっていく。満洲で殆ど生きていられないような窮境に陥ったが、そこから抜け出すこともできない絶望感が最初からこの作品全篇を支配したのである。

子供を生んだ後、「私」はひどい脚気にかかったが、薬をもらうこともできなかった。「一瓶の薬品の値段よりも軽蔑せられた女患者の生命」（平林 1967：24）という悲惨な現実を意識した「私」はついに子供に濁った乳を飲ませる決心をした。「女よ。未来を信ぜよ。子供への愛が深いならば、深いが故に、闘いを誓え。」（平林 1967：24）この一見不可思議な行為について、中山和子が『私』が自分の産んだ赤ん坊に残酷であるとすれば、我児の将来を直観的に見切ってしまうほど、それほど激しく絶望的に敵と向きあっていたからでもある。（中山 2009：92）と指摘した。「投げすてよ」の主人公光代の苦痛と躊躇を伴った階級意識の自覚と比べれば、「施療室にて」の「私」は子供を殺すという極端的な激しい反抗で命懸けで革命運動へ邁進しようとしたのである。

担架担ぎの中国人の登場はちょうどこの「私」が子供に濁った乳を飲ませようと決心をつけた時であった。「私は、寝台のあらい格子の間から、担架の後をかついで行く中国人の辮髪が、尻のあたりでピンピン歩く度にはねかえされているのを見た。中国人が踏んで行く庭の地面には石にひしがれた蒲公英が金色にさいている。」（平林 1967：25）ピンピ

ンとはねかえされる中国人の辮髪と、石にひしがれた金色の蒲公英の花は動と静の対照をなして、死ぬか生きるかの取捨選択を「私」と子供に迫らせた風景である。この時、「私」は既に中国人の辮髪を批評する気力も、蒲公英の花がひしがれたことに感傷的情緒を起こす余裕もなくなり、ただ自分と生まれた子供の生死の問題だけに集中していた。

最後、「私」はとうとう子供に乳を飲ませた。子供が死んだ後、「翌日私は検察官に電話をかけて貰って入獄の手続をすました。」（平林 1967：26）この時も「私」は中国人の車に乗った。「中国人の車屋にたすけられて車にのった。行く手は李家屯の旅順監獄分監だ。」前と同じように中国人車屋について評価一つ与えなかった。「私」が監獄に入ることは革命者としての自己完成ではあるが、しかし、自分と同じ階級の中国人を全く無視することは結局革命者である「私」の革命に対する幼稚で不完全な理解を露呈してしまったのではなかろうか。壺井繁治が「施療室にて」について、「この主人公は闘わんとする決意の前に、すでに敗れているのである。だから悪い乳を飲ませた後の赤ん坊の死の知らせにたいする彼女の姿勢は、虚無的な、それ故に抽象的心理でのみ自己を支えた姿勢であり、しかもこの作者は自己の敗れを意識する代わりに、これが『戦い』であるかのように自分を認識しているように思われる。」（壺井 1983：162-163）と指摘した。たい子は「私」という主人公を革命の「戦い」に向かわせるために意識的にその周りの全ての存在、例えば生まれてきた子供、入獄した夫及び中国人の車屋と担架担ぎなどを切り離して、「私」の内面的充足を達成させようとしたが、しかし、革命の戦いというものはあくまでもそういう自己完成を達成するための孤立的なものではなく、むしろ同じ階級の同志との運動の中で初めて可能になることではなかろうか。自分と同じ階級にいる中国人に対する無関心は革命者の主人公を最初から失敗者と決めつけたといえよう。

「施療室にて」における中国人の二回目の登場は「夫」を始めとする四人の日本人苦力監督が計画したテロに参加した苦力達である。馬車鉄工事の線路を破壊しようとするテロに苦力達は参加していたものの、失敗した後、「苦力達の団結は破れて、争議以前よりもひどい解雇条件で、卑屈な苦力たちは薄い蒲団を背負って埃だらけの布靴で、張作霖の募兵に応じるために、割引の南満鉄道に荷物のように押合って乗込んで去った。」（平林 1967：18）この労働争議は最初から日本人の苦力監督があつてのもので、苦力は日本人の指導のもとで参加しただけである。それが敗れて日本人が投獄されると、苦力はすぐ日本帝国主義政府の手先に等しい張作霖の軍隊に応募したのである。ここでは明らかに植民帝国の日本人を先覚者・指導者に位置づけ、植民地の中国人苦力を卑屈な他者として定義した。ここから見れば、「施療室にて」を書いた平林たい子は自分で自分のことを無産者・革命者と一方的に決めつけたにもかかわらず、実際はやはり自分が宗主国の一員という自意識を持って、植民地の同じ階級にいる中国人を他者と見なし、おのずから自分と苦力と

を隔離してしまったのである。つまりたい子は、プロレタリアートであると同時に植民帝国の一員でもあるという矛盾を内在していたのである。

四 闘争に目覚めた労働者

1929年12月号の『改造』に発表された「敷設列車」は平林たい子のプロレタリア文学時代の最高峰とも言える。この作品に大きな影響を与えたのは青野季吉の論文「目的意識論」だと考えられる。青野が「目的意識論」において「プロレタリアの生活を描き、プロレタリアが表現を求めることは、それだけでは個人的な満足であって、プロレタリア階級の闘争目的を自覚した、完全に階級的な行為ではない。プロレタリア階級の闘争目的を自覚して始めて、それは階級のための芸術となる。」(青野 1954: 215)と述べた。青野が示したプロレタリア文学の「自然成長」と「目的意識」に従って考えれば、「投げすてよ」と「施療室にて」をはじめとするたい子の初期作品は無産者の個人体験を表現し、個人の欲求を求める「自然成長」の文学であり、階級的な「目的意識」を持って革命闘争を描く本当のプロレタリア文学ではなかった。板垣直子も「始めて小説をかこうとした時、手本として彼女に浮んだ文学とは、彼女がそれまでに知った内外の芸術派にたつ文学であった。彼女の異状な経験を創作化しようとする時も、従来の方がより多く親しいのであった。」(板垣 1956: 80)と指摘したことがある。板垣が言った「内外の芸術派」と「従来の方法」はおおよそヨーロッパから日本に伝来した自然主義文学や私小説の類ではないかと考えられる。もしい子は依然として個人の体験に執着し、個人の問題だけを取り上げ続けるなら、たぶんプロレタリア作家としてのたい子の成長は成し遂げられなくなるのであろう。

「敷設列車」は中国人労働者とM鉄道会社——実際は満鉄のことであるが——との闘争を描いた作品である。その背景となるのは洮昂鉄道の建設で、1920年代中国東北地区における日本勢力の浸透を反映した。岡野幸江は「敷設列車」に登場した中国人労働者について「かつて『施療室にて』では、争議の失敗後、団結が破れ『卑屈な苦力たち』は張作霖の募兵に応じて去った。しかし、ここではその『卑屈な苦力』たちが、『圧迫を弾きかえす強い感情』とともに、彼らを侮っていた日本人に対して反撃する存在として成長していくのである。」(岡野 2014: 26)と述べ、「敷設列車」に登場する苦力を「施療室にて」におけるその「成長」と見なしている。なお、竹内実が『日本人にとっての中国像』においても「敷設列車」について、「中国人労働者の革命的な動き、それは、平林たい子の『敷設列車』によって、かなりの水準の高さをもって書かれることができた。それは、『奔放な感覚の横溢が客観的主题をふかめた』ものであるといわれるほどのあざやかさをもつ

ている。」（竹内 1992：139）と述べ、たい子の「敷設列車」を里村欣三の「動乱」や黒島伝治の「武装せる市街」といった中国を題材とするプロレタリア文学の作品と併称して昭和初年の代表作の一つとして取り上げ、特にその中に登場した中国人労働者の革命運動についての描写を高く評価した。

確かに「敷設列車」は中国人労働者群像を主人公とする作品である。しかし、たい子の視点は前半から後半にかけて大きな切り替えがあったと思われる。前半の部分は日本人視点で、中国人労働者を他者化する傾向があるのに対して、後半になっていきなり中国人労働者の内部視点に切り替え、逆に日本人を他者化しようとしたのである。しかし、この後半の内部視点も不完全なもので、中国人労働者を日本帝国主義を批判する者、全世界のプロレタリア同志の一員と書いた一方、途中には視点の移転があり、時にはやはり日本人視点から中国人労働者の行動を不可思議なものとしたところもあった。

「敷設列車」の前半における中国人労働者像は殆ど全ての近代日本作家が描いた苦力像と大差がないものであった。技手鮫島、受託医山田、警務部員といった日本人がいるが、彼らの目から見れば、中国人工夫はまるで人間と異次元の鼠かなにかの陰湿で汚い小動物のようなものであった。それだけではなく、「彼らは理由なく、鼠にも劣った人間の様に自分のことを考えた。」（平林 1987：173）というふうに、苦力の外部にある日本人の視点を苦力内に内在させようとした作者の故意が見られる。この自己認識の根底にある自己卑下は中国人工夫が日本人を恐れる理由となり、日本人の乱暴な監督に不満を持ちながらも反抗する気力がない根本的な原因となってしまったのである。「監督より少し体格のよい彼らの顔は警務部員等のちょうど額の上にある。」（平林 1987：179）というように、苦力の体格も日本人よりよく、400人という人数も日本人の数十倍に達しているにもかかわらず、中国人工夫はなぜか大人しく日本人にいじめられてばかりで、なかなか団結して自分たちの境遇を改善しようとはしなかった。

この時、たい子は中国人を苦力と呼んだり、工夫と呼んだり、支那人と呼んだりして、その呼称がしきりに変わるとともに、彼らの人間像をも二つの部分に引き裂いた。

一つは日本近代文学によく登場する無知で汚くて大人しい苦力である。「あの消極的で我慢強い、生活慾の弱い、貝殻の縁の形に適應して生きる貝の身の様な、支那苦力の一面の性格をそなえた人間」（平林 1987：181）と、たい子は「あの支那苦力」という言葉で、「敷設列車」における中国人労働者と近代日本作家によく描かれた伝統的な支那人像とを結びつけた。その上更に、「過去のことは忘れた、先のことはわからない。ただ現在が紐の様にふん伸びて行きさえすればそれでいいのだ。」（平林 1987：182）というふうに、現在まだ生きていることだけに本能的にすがって、過去未来についての考えなど人間的な知的思想を何一つ持たずに動物同様の生き方に甘んじる前近代的な苦力像を描いた。これは

近代工業の中から生まれた近代的で革命的な労働者とは程遠いものである。こんな苦力は無言の他者として描かれ、日本人の目に映る満洲の原風景の一部分でしかなかった。

これとは対照に、たい子はもう一つの違う中国人労働者像を描き出した。張という人物を代表とする革命の先覚者である。張はかつて「ストライキの煽動犯人」（平林 1987：175）であって、労働者運動に慣れた幹部として描かれた。彼は日本人監督に殴られた時も冷静に対応でき、今敷設中の洮昂鉄道の政治的な意味を分かりきっている。「決して監督に気づかれちゃ駄目だよ。それから仲間を一人でも多くふやすこと。この二つを当分守らなければあ、却ってひどい目に会うぞ」（平林 1987：181）というように、張は一時的な衝動ではなく理性的に労働者闘争を起こす時機を作り上げようとした。

もしこの張を中国人労働者の代表としてもっと詳しく生き生きと描写すれば、張は人間として魅力的な労働者運動の幹部になりえたと思われるが、残念ながらたい子はこの作品であくまでも個人ではなく労働者群像を描き出そうとする故意があったせいも、途中で張という人物を忘れたかのように、後半の賢という人物に急に切り替えた。実は前半では張にいろいろ教えられてだんだん階級闘争に目覚めた洪という人物がちゃんと存在し、後半にはこの洪が張に取って代わって登場すれば筋が通るはずだが、急に前半に全く存在しなかった賢が登場したことによって前半と後半のつながりが切断されてしまったのである。

それだけではなく、前半で気が小さくていくら日本人にいじめられても大人しく我慢していた中国人労働者は後半になると急に勇ましくなった。その転換の契機として蒙古から襲ってくる洪水という外在的なものはあったにせよ、人間内部の精神的転換は何一つなく、ただ日本人技師の外在的な視線だけが読み取れる。「彼は苦力達の団結力を甘く見ていたのである。」（平林 1987：189）その後、苦力達が急に労働者闘争にいかにも慣れた者のように組織的な反抗を始めた。しかも、資産階級の代弁者である日本人監督に反抗するだけではなく、日本帝国という植民宗主国の国家的意志にも反抗しようとしたのであった。彼らは機関車とウイルス氏病というペストにかかった中国人患者を乗せた宿営車だけを洮南に逆戻しに走らせ、日本人が乗った事務車をそのまま残しておいた。「朝まで無気力で大人しかった支那人達の肉体の上には、何か夥しい変化がやって来た様にしか日本人には見えなかった。」（平林 1987：190）ここはやはり日本人視点にたつ描写である。しかし、たい子は自分を鼠よりも卑屈だと思い、貝のように生きることだけに甘んじていたあの苦力がどうして夥しく変化し一躍で成熟した革命者になったのかを明示しなかった。いかにも残念なことである。このように後半の視点は絶えず中国人労働者の内部視点と日本人視点の間で行き来した結果、日本人と中国人のどちらにも深入りはできなかった。

それにもかかわらず、労働者の闘争は確実に進められていった。「彼らは病人の世話や炊事や、運転の仕事を分担して役員をつくり、不完全ながら委員会も成立させた。」（平林

1987：191）これは階級解放と民族独立という二重の目標を目指した中国の新民主主義革命の縮図であったような、「公式的な『ストライキ』」（平林 1987：189）よりも一層意味の深い闘争であった。「投げすてよ」と「施療室にて」に登場した日本人視点から他者化された植民地の「牛のような平和な顔」をした苦力や「卑屈な苦力たち」はこの作品で全世界のプロレタリア労働者の一員となり、彼らを民族的偏見で差別する日本人のほうがかえってプロレタリアの敵となつて、他者となつたのである。その根本的な原因は作者の平林たい子が国籍と民族によって決められた〈日本人〉という国別的民族的身分を乗り越え、自分が日本人よりも全世界のプロレタリア労働者の一員であるという身分だけを持つようになったことに起因しているのではないと思われる。かつて里村欣三が「青天白日の国」で中国の革命者を「我らの先輩」（里村 1927：46）と呼び、その里村と上海で会つた中国の有名な左翼作家郁達夫が「青天白日の国」を載せた同月号の『文芸戦線』に「無産者階級はただ階級あるを知つて、祖国あるを知るべからず」（郁 1927：6）と書いたのである。たい子はおよそ自分が日本帝国の一員であることを忘れて初めてプロレタリアの一員として内部から中国人労働者を描く視点を獲得したのであろう。たとえそれはいかにも不完全なものであるにしても。

しかし残念ながら、「敷設列車」に描かれた中国人労働者は階級闘争に目覚めた群像として生き生きと躍動的なものではあるが、それに対して個人としては全く成り立たないものである。外見も内心もない模糊とした道具のような存在でしかなかった。日本人監督に泥棒にされた時も、同伴を警務部に射殺された時も、個人としてあるべき怒りも悲哀も描出されなかった。いわば、中国人労働者はまるで漠然たるプロレタリアという概念を示す記号のような類型的な存在で、血肉ある人間とは思えない。これは政治の目的意識が過度に追求され、政治理念を無理に創作で実践しようとした結果であろう。満洲という舞台と洮昂鉄道の建設という背景を考えなければ、ここの中国人労働者をそのまま日本人労働者に切り替えても一向に差し支えない。それほど中国人労働者の民族的人間的個性が抹消され、ただ被搾取階級の平板な記号にすぎなかったのである。「敷設列車」に描かれた「中国人労働者の革命的な動き」を高く評価した竹内実もこの作品における人間としての中国人労働者の描き方を『『卑屈な苦力たち』』ということばに、わたしは、異民族として、高みからかれらを見下している日本人の眼を感じる。（中略）わたしたちは、『敷設列車』においては、「天亮了！天亮了！」を勇ましくうたう苦力達に突如としてぶつかるのである。ここに断絶がある。」（竹内 1992：142）と指摘した。全くそのとおりである。いったん満洲の鉄道で働いた個人的な体験を切り捨てれば、平林たい子が描いた中国人像はすぐ類型的なものになってしまう。結局それは日本人としてのたい子の限界を示し、また古い日本文学の伝統から出発し、あくまでも個人の体験に執着する日本人作家としてのたい

子の乗り越えられない枠の存在を示しているのではなからうか。

五 終わりに

青野季吉が「平林たい子論」において「林芙美子の告別式の帰途広津和郎が、宮本百合子、林芙美子、平林たい子とこの三人の女流作家が並び立った姿は、まことに文壇空前の壯観で、今後再び見ることはできないであろうと繰り返して語っていた。」(青野 1983: 169)と書いたが、林芙美子も宮本百合子も中国ではプロレタリア作家、民主主義作家として今でもよく読まれているが、平林たい子だけは忘れられていた。戦時中長い闘病生活を送り、プロレタリア文学の退潮で文壇から一度遠ざかり、戦後にも民主主義文学の陣営に復帰しなかったことが主な原因であると思うが、「敷設列車」で中国人労働者の革命闘争を上手に描いたにもかかわらず、人間的に魅力ある中国人像を作り上げることができず、戦後には身体表現に執着するような中国読者の好みに合わない器量の小さい私小説風の女流文学を書いたのももう一つの重要な原因であろう。

しかし戦後のたい子はプロレタリア作家時代のたい子と全く別人になったわけではない。終始一本の糸によってつながっていると思われる。その糸は社会のどん底に生きていた人、いじめられた人達に向けた理解と同情に満ちた視線であり、自分自身を彼らと同一視し、彼らのためにいくら困難であっても闘いはばからぬ闘争の意志にほかならない。しかもこの糸は中国人を描いた時に最も顕著に示され、故に戦後の「盲中国兵」のような優れた短編も生まれたのであろう。

参考文献

- 青野季吉 (1954) 「目的意識論」『日本プロレタリア文学大系(2)』三一書房, 214-220 頁。
 青野季吉 (1983) 「平林たい子論」『近代女流文学』有精堂出版, 169-174 頁。
 郁達夫 (1927) 「日本の同志に訴ふ」『文芸戦線』第 4 卷第 6 号, 6-7 頁。
 板垣直子 (1956) 『平林たい子』東京ライフ社。
 岡野幸江 (2014) 「平林たい子と満洲: 『敷設列車』から見る 1920 年代」『世界文学』第 120 号, 20-27 頁。
 里村欣三 (1927) 「青天白日の国へ」『文芸戦線』第 4 卷第 6 号, 38-46 頁。
 竹内実 (1992) 『日本人にとっての中国像』岩波書店。
 沈端先 (1933) 《平林泰子集》現代書局。
 壺井繁治 (1983) 「平林たい子論」『近代女流文学』有精堂出版, 148-168 頁。
 戸田房子 (1982) 『燃えて生きよ—平林たい子の生涯』新潮社。
 中山和子 (2009) 「平林たい子 殺す女・女の号泣—プロレタリア女性作家のあゆみ」『国文学: 解釈と教材の研究』第 54 卷第 1 号, 88-96 頁。
 平林たい子 (1967) 「施療室にて」『現代日本文学全集 68』筑摩書房, 18-26 頁。

平林たい子（1979）「投げすてよ」『平林たい子全集1』潮出版社，66-78頁。

平林たい子（1987）「敷設列車」『日本プロレタリア文学集・21 婦人作家集（一）』新日本出版社，170-191頁。

